

分かりやすさと学習意欲を大切にする国語科学習指導の在り方

～ 特別支援教育の視点を生かした授業づくりを通して～

目 次

研究主題	4 - 1
主題設定の理由	4 - 1
研究目標	4 - 2
研究仮説	4 - 2
研究経過	4 - 2
研究構想	4 - 3
研究内容	4 - 3
1 研究の基本的な考え方	4 - 3
2 研究内容のとらえ方	4 - 9
研究の実際	4 - 9
1 児童の教育的ニーズの把握について	4 - 9
2 自己肯定感が低下する要因の分析	4 - 10
3 分かりやすい授業のモデル構築	4 - 11
4 第1回検証授業の実際(小学校第3学年「ほけんだよりを読みくらべよう」)	4 - 12
5 第2回検証授業の実際(小学校第3学年「サーカスのライオン」)	4 - 16
成果と課題	4 - 20
《引用・参考文献》	4 - 20

研究実践学校 延岡市立南小学校
研 究 員 海 老 原 学

分かりやすさと学習意欲を大切にす国語科学習指導の在り方
～特別支援教育の視点を生かした授業づくりを通して～

主題設定の理由

特別支援教育が平成19年度から実施され、現在では、各学校だけでなく広く一般社会においても特別支援教育や発達障がい等についての関心が高まっている。平成14年に実施された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の結果では、知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面に著しい困難をもっている担任教師が回答した児童生徒の割合が6.3%であることが示された。また、今年度から小学校で全面実施になった新学習指導要領総則編の中では、障がいのある児童については、特別支援学校等の助言や援助を活用しつつ、個別の指導計画を作成したり、指導内容や指導方法の工夫を計画的・組織的に行ったりして、効果的な指導を行うことがうたわれている。これらは、すべての学校の通常の学級において特別な支援を必要としている児童がいることのあらわれであり、障がいの有無にかかわらず、すべての児童を包み込んだ指導の在り方が問われる時代になってきたといえる。

このような背景から、延岡市においては児童一人一人の教育的ニーズに応える学校の支援体制づくりを課題に挙げ、学力向上と特別支援教育の充実を教育実践の重点事項として位置付けている。

本校は、教育目標「夢いっぱい・花いっぱい・笑顔輝く南っ子の育成」を達成するための努力事項として「分かる授業の工夫、基礎学力の定着・向上、個に応じた指導・支援の徹底、学習意欲の継続化を図る授業構築」を明示している。職員は「児童の実態把握とその実態に応じた指導方法の工夫改善」、「すべての児童に称賛の声かけ」、「児童一人一人の長所を生かす指導」を心がけている。また、本校では昨年度から校内研究で「一人一人が分かる・できる・楽しさを感じる授業づくりの研究～ユニバーサルデザインを意識した算数科を中心に～」に取り組んでいる。その結果、児童は落ち着いて学習に取り組み、教師は授業を計画通りに展開できるようになり、児童も教師も研究の成果を実感できつつある。さらに、特筆すべき成果として、「特別支援教育は特別なもの」という意識から「特別支援教育の考え方は通常の学級でも大切である」というように教師の意識が変わってきたことが挙げられる。

そこで、算数科だけでなく、学習する時間が最も多く、すべての教科等で充実が求められている言語活動の基本となる言語能力を育成する国語科において特別支援教育の視点を生かした研究を推進することは非常に価値があると考えた。本校には、人前で話すことが苦手、話を聞いてもよく理解できない、書いたり読んだりすることにかかなりの時間を要する、話合いの時間に何をしたいかわからないなど、授業に対して困難さを抱える児童が存在する。このような困難さを解消することは、特に国語科では重要である。なぜなら、国語科の目標に掲げられている「伝え合う力を高める」とは、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする力を高めることであり、この力は他教科等においても必要不可欠なものだからである。また、国語科の三領域「話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと」は、他教科等の指導とも密接な関係があり、このような特性をもつ国語科の授業づくりを研究するという事は、他教科等の授業づくりにも効果的であると考えた。

また、通常の学級に在籍する児童の中には学習面や行動面で困難さを抱えるために、自信を失ったりよく叱責を受けたりして、学習意欲が低下する事例が見受けられる。これに対応するためには発達障がいの有無に関わらず、適切な指導や支援をして自己肯定感を高めていく必要がある。自己肯定感が高まることは、学ぶ意欲や確かな学力や望ましいコミュニケーション力等の向上にも大いに関係し、生きる力の育成にも必要不可欠な条件であると考えた。

このように、特別支援教育の視点を生かした通常の学級での学習指導を充実させることは、これからの教育現場の大きな課題であり、国語科における学習指導の在り方を究明することは多くの先生方にとっても価値があると考えた。

以上のような理由から、本主題を設定した。

研究目標

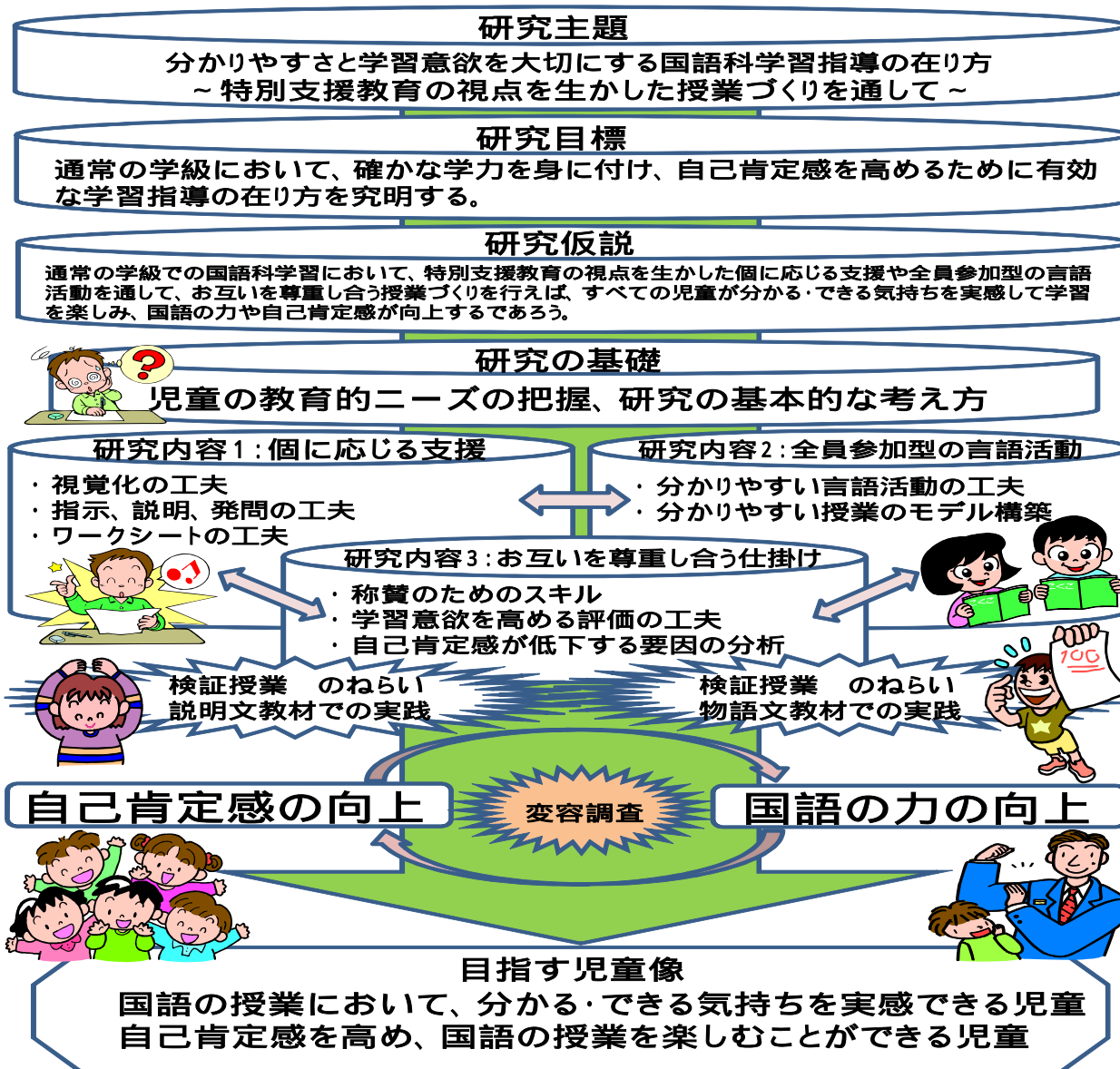
通常の学級において、確かな学力を身に付け、自己肯定感を高めるために有効な学習指導の在り方を究明する。

研究仮説

通常の学級での国語科学習において、特別支援教育の視点を生かした個に応じる支援や全員参加型の言語活動を通して、お互いを尊重し合う授業づくりを行えば、すべての児童が分かる・できる気持ちを実感して学習を楽しみ、国語の力や自己肯定感が向上するであろう。

研究経過

月	研究内容	備考
4	研究全体構想 研究主題・副題、主題設定の理由、研究仮説、研究内容、研究計画等の設定	
5	課長ヒアリング 児童及び職員への意識調査 特別支援教育の視点を生かした国語科授業づくりの検討 検証授業の準備（指導案作成、教材研究、資料作成等） 学力向上と自己肯定感の向上について 検証授業の事前打ち合わせ	
6	検証授業の実施と考察 研究理論構築	授業後の実態調査 研究の方向性の修正 延岡市立南小学校 6月23日実施
7	特別支援教育の視点を生かした国語科授業づくりの再検討 中間発表会の資料作成（報告書、発表原稿、プレゼンテーション） 研究理論構築	
8	中間発表会の準備・実施 中間発表を受けての理論の再構築	中間発表会 8月25日実施
9	検証授業の準備（指導案作成、教材研究、資料作成等） 検証授業の事前打ち合わせ	
10	検証授業の実施と考察 研究状況説明会の資料作成（報告書、発表原稿、プレゼンテーション）	授業後の実態調査 延岡市立南小学校 10月21日実施
11	研究状況説明会の準備・実施 研究状況説明を受けての研究のまとめ方の検討	研究状況説明会 11月10日実施
12	研究仮説の検証及び研究の成果と課題のまとめ 研究報告書の作成	
1	研究報告書の作成（報告書、発表原稿、プレゼンテーション）	
2	研究報告書の作成（印刷、製本） 県教連研究発表大会の準備・実施	県教連研究発表大会 2月10日実施
3	研究員研究発表会の準備・実施 研究のまとめと反省（研究パネル作成、Webページ掲載）	研究員研究発表会 3月12日実施



研究内容

1 研究の基本的な考え方

(1) 国の動向から

学校教育法の一部改正により特別支援教育が始まった平成19年4月1日、文部科学省は「特別支援教育の推進について(通知)」を通して、次のようなことを周知した。

特別支援教育とは・・・

児童一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善または克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うもの。

知的な遅れのない発達障がいも含めて、特別な支援を必要とする児童が在籍する全ての学校において実施されるもの。

障がいの有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるもの。

(文部科学省初等中等局長「特別支援教育の推進(通知)」より要約)

また、今年度から全面実施された小学校学習指導要領総則において、配慮すべき事項として次頁にあることが明記されている。

教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深めること。

児童が学習内容を確実に身に付けることができるよう、児童の実態に応じ、指導方法を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること。

障がいのある児童などについては、個々の児童の障がいの状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的に行うこと。

児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。

(小学校学習指導要領総則「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」より一部要約)

現在、国ではインクルーシブ教育システム構築に向けて、特別支援教育の方向性が議論されている。インクルーシブ教育とは、「包括的な」「包み込む」教育という理念であり、多様な個人が同じ場で共に学ぶことができる教育システムの構築が望まれている。

本研究では、このような国の考えを踏まえた上で、特別支援教育は、決して「特別なもの」ではなく、すべての教員がその理念を理解し、実践していかなければならないと考えた。なぜなら多くの通常の学級には、障がいの有無にかかわらず特別な支援を必要とする児童が在籍しているからである。

(2) 県の動向から

県教育委員会は、第二次宮崎県教育振興基本計画（平成23年7月）において、「共生社会を目指す特別支援教育の推進」を施策の1つとして示した。共生社会とは、障がいの有無やその他の個々の違いを認識しつつ、様々な人々が生き生きと活躍できる社会のことである。学校教育においては、特別支援学校や特別支援学級、通級による指導といった、場を分けた指導だけでなく、通常の学級において、障がいの有無に関わらず多様な個人が能力を発揮しつつ、お互いを正しく理解し、共に助け合いながら学習できるようになることが求められている。本研究では、共生社会の実現に向けたインクルーシブ教育の具現化には、通常の学級における学習指導の充実が必須であるととらえ、特別支援教育の視点を生かした通常の学級での授業研究を行うことにした。

(3) 教科指導における特別支援教育の在り方

通常の学級において、教科指導力のある教師には資料に示すような特徴があると考えられる。これらは、特別支援教育で大切にしている内容と共通していることが分かる。そこで、本研究では従来の教科指導と特別支援教育の視点からの指導において共通する指導方法を中心に、一斉指導における授業改善を行うこととした。通常の学級で行う特別支援教育とは、決して授業のレベルや指導内容の難易度を下げることではない。すべての児童が教科の目標を達成できることを目指して行う「やさしい教育」が本研究の中核である。教科指導と特別支援教育を別々にとらえるのではなく、この2つが一体となって実践につながるものが大切であると考えた。

教科指導上で大切なこと

できないことや苦手なことを解消させることを重視する。等

教師力

人柄が明るい。
(笑顔、目線、表情、声、態度などに好感がもてる。)
話し方や話す内容が明確。
(話が聞き取りやすい、説明が具体的に分かりやすい。)
自己研鑽に努めている。
(授業等がうまくいかなくても、児童のせいにはしない。)

授業力

授業の流れが明確。
(学習の見通しがもてる、スモールステップでの指導。)
授業のテンポが心地よい。
(指示や発問が端的、時間を意識した指導。)
指導と評価の一体化ができています。
(PDCAサイクルによる教科指導、理解の確認と対応。)
よくほめる。
(叱責よりも称賛の方が多く、できたことを認める。)

学級経営力

学級経営も上手。
(人間関係が良好で、児童同士のかかわりが密である。)
児童理解に長けている。
(一人一人をよく観察している、得意なことを伸ばす。)

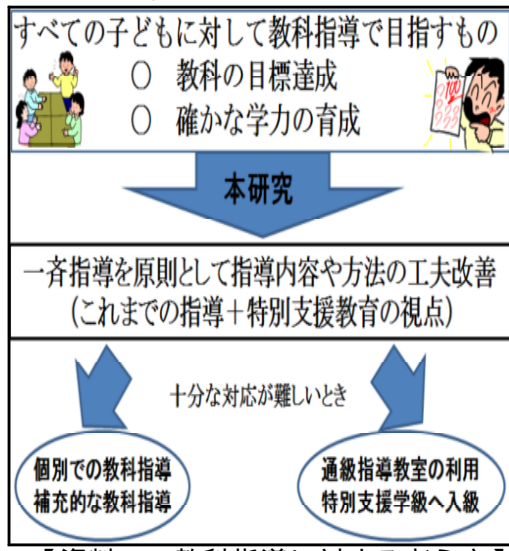
児童の実態から個別の目標を立て、個別指導を重視する。等
特別支援教育で大切なこと

【資料：共通する部分のイメージ図】

「やさしい教育」とは、以下のように2つの意味があると考えた。

「優しい教育」：児童への思いやりがあり、一人一人にきめ細かく配慮する教育。
 「易しい教育」：分かりやすい指導で、児童が学習内容を理解・習得しやすい教育。

「優しい教育」によって自己肯定感が高まり、「易しい教育」によって国語の力が高まるととらえた。本研究の手法を取り入れても十分な対応が難しい時には、特別な場において個別での指導や補的な指導が必要になるかもしれない。宮崎県においては、特別支援学級や通級による指導で学習している児童生徒の数は年々増加傾向にある。しかし、まずは通常の学級における授業を工夫改善し、すべての児童を包み込んだ指導を行うことを大切にしたいと考えた。(資料)



【資料】：教科指導に対する考え方

(4) 授業のユニバーサルデザイン (以下：UDと表記する)

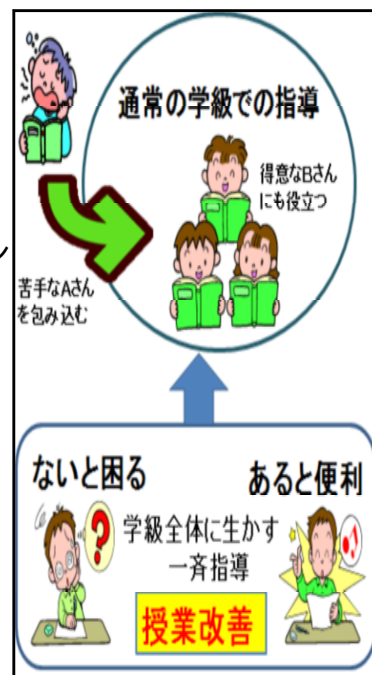
本研究では発達障がいの有無に関わらず、すべての児童が対象である。特別支援教育の視点を生かしながら、通常の学級での学習指導が充実する一斉指導のスタイルを確立するため、授業改善という形で通常の学級での学習指導を見直していこうと考えた。その際に大切な考え方が「授業のUD」である。

通常の学級における特別支援教育の視点を生かした授業について、植草学園短期大学の佐藤慎二教授は次のような定義をしている。

「授業におけるUD」
 ~特別支援が必要な子どもには『ないと困る支援』であり、
 どの子どもにも『あると便利な支援』を少しでも増やす。~

所属校では、昨年度から「視覚化」「焦点化」「共有化」を柱としたUDによる算数科の授業実践を行っている。すべての児童が分かる・できる・楽しさを感じられるように工夫・配慮された「シンプルで効果的な楽しい授業」を目指して実践していくと、多くの児童の学習意欲が高まり、学力も向上したという結果が得られた。そこで、それを土台として国語科においても分かりやすくして学習意欲が高まるような授業づくりを研究することとした。

学級には、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」等が苦手な児童が複数いる場合が多いと思われる。その児童一人一人のつまずきに対する支援を個々に対応するという発想は、1人の教師で教える一斉指導においては現実的ではない。通常の学級で教科指導を行うよさは、能力差のある様々な児童が、1つの教室の中で共にかかわり合いながら学ぶことにあると考える。



【資料】：UDのイメージ図

国語が苦手な児童にとって必要な支援を個だけでなく全体に行うことで、学級全員にとって分かりやすい授業になったり、国語が得意な児童と苦手な児童がかかわり合うことで学び直しや理解の促進につながったりする。また、同じ学習内容を同じ教室で友達とともに学び、分かたりできたりする経験を通して自己肯定感が高まる。このように、すべての児童にとってメリットがあるものが授業のUDであると考えた。(資料)さらに、UDを意識した分かりやすい授業づくりをすることは、教師の教科指導力の向上にもつながると考えた。

(5) 本研究で用いる主な用語の定義について

ア 『特別支援教育の視点を生かした学習指導』とは 研究主題より

分かりやすい授業、できたという成就感（成功体験）を味わわせることができる授業、不要な失敗を経験したり、不安な気持ちになったりせずすむ授業につながる学習指導のことである。教師が特別支援教育の視点を生かした学習指導を行うことで、次のような効果を児童に与えることができると考えた。

学習指導上のポイント	授業に対する児童のとらえ方
<p>十分な児童理解（その子ができることに目を向けて、そのよさを学習に生かす指導）</p> <p>P D C A サイクルで授業実践（児童の教育的ニーズの把握 授業構想 実践 改善）</p> <p>情報の視覚化（写真や挿絵の活用、見やすい板書、色チョークの活用、I C T 活用）</p> <p>教師の言葉の精選（端的で具体的な指示・説明・発問、一指示一動作）</p> <p>指導過程の工夫（問題のシンプル化、学習活動の細分化、十分な活動時間の確保）</p> <p>称賛の大原則（心から・すぐに・話し言葉や書き言葉で・動作や表情でほめる）</p> <p>教室環境の整備（黒板周辺の構造化、机周辺の整理整頓、意図的な座席配置）</p>	<p>自分の居場所があり、学習に対する意欲が出てくる。</p> <p>自分ができるようになったことが分かる。</p> <p>今、注目すべきことや、やるべきことが何なのかが分かる。</p> <p>教師の指示が何なのかが分かる。</p> <p>教師の発問の意味が分かる。</p> <p>教師や友達の説明が分かる。</p> <p>今、学習している内容が分かる。</p> <p>自分の存在価値や頑張っている友達の姿が分かる。</p> <p>学習に集中しやすくなる。</p> <p>いろいろな友達とかかわれる。</p>

このような学習指導は、特別支援教育の視点でもあるが、従来の教科指導でも大切にされてきたものでもある。特別支援教育だから特別な学習指導をするのではない。特別支援教育の視点で「よい」と思われる指導法は、通常の学級での指導法でも「よい」ということを本研究を通して検証していきたい。

イ 『国語の力』とは 研究仮説より

学校教育法第30条第2項により、確かな学力とは「基礎的な知識及び技能」「思考力、判断力、表現力その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの要素で定義されており、この3つをバランスよく育む必要がある。また、小学校国語科の目標には、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」とあり、この目標を達成するためには国語科の三領域「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を関連させながら指導していくことが不可欠である。

そこで、本研究で用いる国語の力とは、「話すこと・聞くこと、書くこと、読むことについての知識・技能」及び「学習意欲」のことと定義した。

ウ 『自己肯定感』とは 研究仮説より

自己肯定感とは、まわりの環境やこれまでの経験など多くの要因が絡み合って育まれる感情である。これと類似した言葉で、「自信」「自尊感情」「自己有用感」「自己評価」などもあるが、本研究で用いる自己肯定感とは、自分のよい面だけでなく、苦手な面も含めて、ありのままの自分を受け入れられる気持ちのことと定義した。発達障がいのある児童は自己肯定感が低い傾向にあるという指摘をしばしば聞くことがあるが、すべての児童の自己肯定感を高めることを本研究では大切にしたい。なぜなら、自己肯定感があってこそ、学習に主体的に取り組んだり友達とかかわろうとしたりすると考えたからである。そこで、児童一人一人の言動や存在を認め称賛を中心として肯定的にかかわることで、自己肯定感を高めることと国語の力の向上を関連させて研究に取り組むことにした。

(6) 国語の現状

ア みやざき小中学校学力・意識調査より

平成20年度から23年度までの結果を見ると、次のようなことが分かった。(資料)

「国語の授業が好き」と肯定的な回答をした児童生徒の割合(%)と全教科等での順位						
【小学5年】			【中学2年】			他教科等と比べ、国語の授業を好きな児童は少ない。中学校も小学校とほぼ同様の結果である。
	(%)	(位)		(%)	(位)	
平成20年度	70.5	10	平成20年度	65.4	9	
平成21年度	71.2	10	平成21年度	64.0	9	
平成22年度	72.7	10	平成22年度	66.0	9	
平成23年度	72.6	11	平成23年度	65.1	9	

「国語の授業が分かる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合(%)と全教科等での順位						
【小学5年】			【中学2年】			得意な児童生徒の方が苦手な児童生徒より、質問ともに肯定的に答えており、学力と関連が深い。
	(%)	(位)		(%)	(位)	
平成20年度	91.7	6	平成20年度	85.6	4	
平成21年度	91.3	5	平成21年度	84.1	5	
平成22年度	92.0	5	平成22年度	86.6	5	
平成23年度	91.5	6	平成23年度	85.8	5	

「学校の授業に関する分析」に記述されていること。

- 小学生は、「先生が1人で学級のみなを教える」形態を最も肯定的にとらえている。
- 国語は、「好きな授業」及び「分かる授業」の両方において、得意な児童と苦手な児童の差が大きく見られ、学力との関連が深い。

【資料】：国語の授業に関する意識調査結果(県全体)

この結果を見ると、「多くの児童は、習熟度別・少人数指導やTT指導よりも担任1人による一斉指導の授業形態を肯定的にとらえている」「国語が苦手な児童にとっては、国語の授業はあまり好きになれず、分かりにくいという傾向が見られる」という2点が明らかになっている。また、この調査結果には、国語の授業における指導改善のポイントも記述されている。そこで、検証授業で扱う「読むこと」の領域に記述されているポイントを洗い出して次のように整理した。(資料)

叙述を基に登場人物の相互関係や心情・場面の移り変わりをとらえる言語活動の充実
・ 登場人物の行動や会話、情景描写に注意しながら、登場人物相互の関係や心情の変化を読み取らせること。
・ 読み取った内容を条件に応じて書くような活動を1単位時間の中に設定し、理解をより一層深める指導を行うこと。
・ 各場面の様子に気を付けながら、場面と場面とを関係付けて読ませたり、読んだ感想を述べ合ったりすること。
目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえる言語活動の充実
・ 文章の内容を的確に押さえるために、文章に書かれている話題、理由や根拠となっている内容、構成の仕方や巧みな叙述などに注意して読み進めていくこと。
・ 中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考えて文章を読み取らせること。
・ 内容の中心をとらえたり、段落相互の関係を考えて全体の構成を把握し、自分の考えをまとめたりしながら読ませること。

【資料】：国語科「読むこと」に関する指導改善のポイント

このような調査結果を生かして、本研究においては一斉指導における授業改善を通して、国語が得意な児童だけでなく、苦手な児童にとっても楽しくて分かりやすい授業づくりについて考えていくことにした。

イ 学習指導要領解説より

本研究における検証授業の対象は小学3年生である。そこで、三領域の調和的な指導を通して、3年生に身に付けさせたい国語の力を次のように整理した。(資料)なお、以下の力は2回の検証授業(説明文教材、物語文教材)において指導したい力である。

互いの立場や考えを尊重し、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりできる力。
理由や事例などを挙げながら筋道を立て、適切な言葉遣いで話すことができる力。
互いの考えの共通点や相違点を考え、話し合うことができる力。
事実と意見との関係に注目したり、接続語や文末表現に注意して、読んだり書いたりすることができる力。
中心となる語や文をとらえ、要点をまとめることができる力。
登場人物の気持ちの変化を、叙述を基に想像して読むことができる力。
内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読できる力。
考えたことや分かったことなどを進んで知的に学び合うことができる力。

【資料 : 小学3年生に身に付けさせたい力】

(7) 自己肯定感の現状

財団法人日本青少年研究所が2011年2月に発表した「高校生の心と体の健康に関する調査 - 日本・アメリカ・中国・韓国の比較 - 」によると、日本の高校生の自己評価が最も低く、自分を価値ある人間だと思ったり、自分を肯定的に評価したり、自分に満足したりしている割合は10%にも満たないことが示された。

そこで自己肯定感に関する客観的なデータを得るために、みやざき小中学校学力・意識調査の結果を見ると、次のようなことが分かった。(資料)

「自分にはよいところがあると思う」という質問に肯定的な回答をした児童生徒の割合(%)				
【小学5年】	(%)	【中学2年】	(%)	下がり具合 - 16.6 % - 17.9 % - 13.6 % - 15.5 % 中学生の方が小学生よりも大幅に自己肯定感が下がっている。
平成20年度	74.6	平成20年度	58.0	
平成21年度	75.7	平成21年度	57.8	
平成22年度	74.7	平成22年度	61.1	
平成23年度	74.9	平成23年度	59.4	
「自分に関する分析」に記述されていること				
・ 他の質問と比較すると、「自分にはよいところがある」ことに関して肯定的に答える割合が低い。中学校でも同様の傾向が見られる。				

【資料 : 自己肯定感に関する意識調査結果】

このように、「学年が上がるほど自己肯定感が下がる」「自己肯定感について全体的に評価が低い」傾向があることが明らかになった。

「9才の壁」という言葉があるように、検証授業対象の小学3年生は、学習が具体的な内容から抽象的な内容になるため、学習面に困難さを抱える児童が増加しはじめる学年でもある。学習面での困難さが行動面にもマイナスの影響を与える事例も少なくない。その結果、学習面や行動面で学級集団に適應することが難しくなり、自己肯定感が低くなりはじめるのがこの年齢ではないかと考えた。だからこそ、比較的自己肯定感が高い小学生の時期に、もっと自己肯定感を高めるような取組を、日々の授業を通して行うことがとても大切だと考えた。

2 研究内容のとらえ方

(1) 個に応じる支援について〔研究内容1〕

視覚情報は、聴覚情報と比較して記録(映像)として残り、具体的であることによさがある。視覚情報は、聞くことが苦手な児童には『ないと困る』ものであり、それ以外の児童にも『あると便利』で役立つものである。そこで、個に応じる支援の1つ目の手立てとして「視覚化の工夫」を試みた。授業改善においては、具体的に理解させたり見通しをもたせたりして聴覚情報だけでは不足することを補い、学力の優劣に関係なくすべての児童の分かりやすさにつながる支援を考えた。2つ目の手立ては「指示・説明・発問の工夫」という視点で教師の言葉を簡潔にすることも分かりやすさにつながる支援と考えた。3つ目の手立ては「ワークシートの工夫」という視点で児童の能力差に応じることで学習意欲を高めたり、書くことへの困難さを軽減したりすることになると考えた。

(2) 全員参加型の言語活動について〔研究内容2〕

新学習指導要領では言語活動の充実が最重視されているが、国語科の授業は言語活動そのものである。国語が得意な児童も不得意な児童も一緒になって言語活動を行い、全員が主体的に取り組む国語科の授業が展開されたとき、全員の国語の力は向上し、自己肯定感も高まると考えた。そこで、すべての児童にとって優しいユニバーサルデザインの授業づくりをするために、「分かりやすい言語活動の工夫」のいう視点で授業を改善することとした。また、全員の学習意欲を高めるために「分かりやすい授業のモデル構築」を行うことを目指して研究を行うこととした。

(3) お互いを尊重し合う仕掛けについて〔研究内容3〕

分かりやすさと学習意欲を大切にする授業を行うには、児童と教師、児童同士の良好な人間関係が醸成された学級であることが不可欠である。そのためには、教師自らが授業において称賛することを重視し、児童のよさを伸ばすようにする工夫が必要である。また、学び合いの時間に児童同士の関わりが深まるように称賛を心がけた学習指導を展開することもお互いを尊重し合うためには重要である。本研究では、称賛によって学習意欲が増し、国語の力と自己肯定感が相乗効果で高まると考えた。そこで、「自己肯定感が低下する要因の分析」を通して教師の「称賛のためのスキル」を明確にしたり、「学習意欲を高める評価の工夫」の視点からは、児童の自己評価と教師の評価をもとにPDCAサイクルの授業改善を行ったりすることとした。

研究の実際

1 児童の教育的ニーズの把握について

特別支援教育においては、児童理解を通して個の学び方の特性をとらえていくことを大切にしている。本研究では、学級担任と実態把握について話し合う機会を複数回設けたり、児童の様子や国語に関する能力について学級担任に記録していただいたりした。また、特に気になる児童については、所属校の個別の指導計画を見直しながら、これまでの配慮事項や専門家のアドバイスなどを整理し、指導に生かすことにした。次頁に記した指導上の配慮は、気になる児童だけに有効なのではなく、多くの児童にとっても有効であると考えた。(資料)

<p>A 児に対して</p> <p>視覚優位なので話し言葉だけではなく、目で見て分かるような手立てを使って支援する。複雑でいろいろな要素が含まれたものよりも、必要なものだけに絞った視覚支援をする。1つ1つのものごとを順番通りに考えていくことが得意なので、手順を書いて示したり、全体を部分に分けたり、パターン化された課題を出したりして支援する。漢字については、パーツを意識したり、手本を見ながら書いたりする支援が有効である。当然分かっているだろうと思われることについても、分かりやすく丁寧に説明をする。</p> <hr/> <p>B 児に対して</p> <p>課題が早く終わったときなどに別のことをしてしまうので、全体の見通しを持たせたり、課題が終わった後にすることを具体的に指示したりする。</p> <hr/> <p>C 児に対して</p> <p>落ち着いて学習することが苦手なので、物的環境を整えたり、見通しを持たせたりして、本人が安心でき集中しやすい環境をつくる。長い文章を言葉だけで聞き取ることには苦手さがあるので、本人の注意が向いていることを確認しながら、端的な表現で穏やかに話しかける。話の内容は必要なことにポイントを絞ったり、選択肢を出したりする。課題を一度に多く示すと学習意欲が減退するので、取り組む内容を小分けにする。はじめに見通しをもたせて全体が把握できるようにすることも必要である。</p>

【資料 : 児童の実態把握を基にした対応例 (指導上の配慮)】

2 自己肯定感が低下する要因の分析

自己肯定感が低下した状態とは、「自分に自信がない」「自分が好きではない」等のように自分に対して否定的な気持ちになったときだと考える。そして、学習に困難さを抱えている児童の多くは、このような状態にあることが多いのではないかと推測した。そこで、所属校の先生方にアンケートを実施し、現在指導している児童の中でどのような困難さを抱えている児童がいるかを把握した。結果は以下のとおりであった。(資料)

(アンケート回答者 : 22名)

項目	人数
発表したり、自分の考えを話したりすることが苦手。	18
人の話を聞くことが苦手。	17
ペアやグループで話し合うことが苦手。	13
自分の考えを書くことが苦手。	16
板書等を写すことが苦手。	13
教科書を読むことが苦手。	13
文章の意味を理解することが苦手。	15
文字や漢字を書くことが苦手。	18
学習規律がほとんど身につけておらず、授業への参加が困難。	3
その他の困難さを抱えている。	5
学習指導をする上で、気になる子どもはいない。	1
<p>【その他の困難さ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・注意力や集中力がない。今やっていることを忘れて別のことをしようとする。 ・自閉症でこだわりが強かったり、友達とのコミュニケーションがうまくとれなかったりする。 ・空気を読まない発言が多い。整理整頓ができない。大きな声でしゃべりながらでないと言動できない。 ・学習の準備ができない。 ・集中力に欠ける。手遊びが多い。 	

【資料 : 困難さを抱えた児童の実態】

アンケート結果から、国語の力である「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のすべての領域において苦手意識があるという回答が多かった。つまり、逆に考えればこれらの領域の指導をきめ細かく行えば、自己肯定感の低下は防げるのではないかと考えた。

3 分かりやすい授業のモデル構築

そこで、国語の力である「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のすべての領域に関する指導のポイントを中心にまとめ、右のような一覧表を作成した。(資料)

この表のポイントを意識して教材研究を行い、指導案には指導上の留意点の欄に、特別支援教育の視点で大切なことを記述するようにした。また、他の先生方に授業を見ていただく際、特別支援教育の視点を共通理解するために、指導・支援で配慮することを吹き出して囲んで表記するよ

「話すこと」について	<ul style="list-style-type: none"> ・ どう伝えればよいかをパターン化して具体的に示す。(話型表や話し合いマニュアルの活用) ・ 子どもが話した内容についてよかった点などを伝える。(称賛のスキル) ・ 書いたものを見ながら話をさせる。(話し言葉の視覚化) ・ 教師と一緒に読むことで緊張をほぐし、自信をつけさせる。(読み方のモデリング)
「聞くこと」について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 静かな状態してから話す。(静かで聞きやすい環境作り) ・ ポイントをしばって端的に、明確に話す。(分かりやすい言葉・内容) ・ 視覚的な提示を行いながら話す。(分かりにくい言葉の視覚化) ・ 1回に1つの指示をする。(一指示一動作) ・ 話し終わった後にちゃんと聞き取れたかを確認する。(復唱による確認)
「書くこと」について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 板書と同じ内容のものを書かせる。(書くことの分かりやすさ) ・ 板書する文字の量を少なくし、文字色や字体の大きさを工夫し、見やすく書きやすい板書にする。(書く質) ・ 全部書くもの、途中で書くもの、ワードだけ書くものなど段階をもたせる。(書く量)
「読むこと」について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 読めない文字にはふりがなをつける。(ヒントの視覚化) ・ 文節読みや交互読みなどの方法を取り入れる。(変化のある繰り返し) ・ 読むところだけ見えるようにする。(厚紙、定規、蛍光ペン、サイドライン等) ・ 課題の説明に絵や図を取り入れ、文字以外の情報の助けを借りて学習させる。(視覚化) ・ 単語をフラッシュカードにして絵カードを選び取るゲームを通して、意味理解を促す。(活動の見直し)
「その他」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要なものを机に出し、使わないものは片付けるルールを決める。(物的環境) ・ タイマーを活用して、時間の進み具合を視覚的に理解させる。(時間の見直し) ・ 学習活動の見直しを具体的に示す。(活動の見直し) ・ できるだけ称賛の言葉かけをし、分かりやすく興味をひく授業を心がける。(全体への称賛のスキル) ・ 適切な行動ができたときに、すぐに称賛することで正しい行動を強化する。(個への称賛のスキル) ・ 肯定的な言い方や自己決定できる余地を残した言葉かけをする。(相手の尊重) ・ 机上での静的な課題と、動きの変化をもたせた動的な課題を授業中に計画的に展開する。(学習意欲や集中力の持続) ・ その子に応じたできる課題で選んだり、言葉かけや身体動作等による称賛をしたりして、自信を持たせたり、認められているという実感を持たせたりする。(称賛のスキル) ・ 授業態度の目標を段階的に提示して意識化させる。(スモールステップ)

【資料 : 分かりやすい授業にするための指導のポイント】

うにした。(資料)このような工夫を授業モデルを基に指導案に反映させることで、教科指導に特別支援教育の視点を融合して授業を行うという本研究のねらいを授業研究レベルで示すことができると考えた。また、授業モデルにおいては学習指導過程だけでなく、教室環境についても分かりやすい授業にするためのポイントを整理し、授業で検証することにした。

全8時間を通して、配慮する指導・支援のポイント	
<p>話すこと・聞くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ワークシートに書いたものを読む。話し方のパターン化を図る。(8時間目) ○ 指示や説明は簡潔にする。1回に1つの意味だけ伝える。(毎時間) ○ 視覚的な情報提示をうけながら話を聞く。(毎時間) ・ 教師や友だちが話したことを意図的に復唱させる。(必要に応じて) 	<p>書くこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自由記述式やキーワードの穴埋め方式などのワークシートを選択させ、個の書く能力に対応する。(2~5時間目) ・ ワークシートに書くことと板書の内容を同じにする。(2~5時間目) ・ 書く時間を十分にとり、書き終わるまで待つ。(6~7時間目)
<p>読むこと(音読)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 読めない漢字にふりがなをつける。(1~3時間目) ○ 教師と一緒に読む。(必要に応じて) ○ サイドラインを引いたり、厚紙で不要な文章をかくしたりして、読むべき文章だけに注目させる。(1~5時間目) ・ 交互読み等で変化のある音読をする。(1~4時間目) 	<p>読むこと(読解)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 挿絵等を使って、視覚化により言葉の意味理解を助ける。(2~4時間目) ○ 説明や発問を簡潔にする。(毎時間) ・ 教科書の記述に基づいて思考、表現できるように、大事な言葉に印をつける。(2~6時間目)

学習指導過程				
段階	学習内容・活動および「教師の主な指示・説明・発問」	指導上の留意点(吹き出し: 特別支援教育の視点)	評価規準(評価方法)	準備
1	新出漢字「実」を練習する。「読み方の練習をします。」	・ 空書き→指書き→なぞり書きの順で一斉に指導する。		実物投影機 アロケータ スクリーン (固定)漢字の
	<p>・ 児童用の「別」と同じものを拡大提示して、どこを練習するのが明確にする。</p> <p>・ すでに習った「画」などの漢字の復習を行い、正しく読める児童を称賛し、学習意欲を高めた状態にして本時の学習に臨ませる。</p>			

【資料 : 授業モデルを基に作成した指導案】

なお、検証授業において3年生の段階で習得させたいことは「要点の整理」である。要点、感想、考えや理由、筋道などを整理しながら文章の組立を考えていくことが求められる。そのために、「絵や写真などの視覚的な手がかりを使う」「日常生活の具体的な経験と関連付けたりして物語の筋道を考える」「5W1Hの質問なども用いながら事実や考え、思いを導き、整理する方法を知らせる」「グループ学習などを活用して他者との意見を共有する」などの工夫も検証授業で取り入れていくことにした。

4 第1回検証授業の実際（小学校第3学年「ほけんだよりを読みくらべよう」）

ア「視覚化の工夫」と「分かりやすい授業のモデル構築」の観点から

注目すべき教科書の文章をいつでも見られて、全員が同じように思考したり作業したりしやすいように、実物投影機を使って常に黒板の右半分に教科書が拡大提示できるようにした。大事な言葉に印をつけたり、サイドラインを引いたり、文章に書いてあることを一斉に確認したりするときなどに活用した。（写真）



【写真：教科書の拡大提示】

板書については、黒板の左側を使った。分かりやすく学習できるように、書く場所や1行の文字数などはワークシートと対応するような板書計画を立てて実践した。

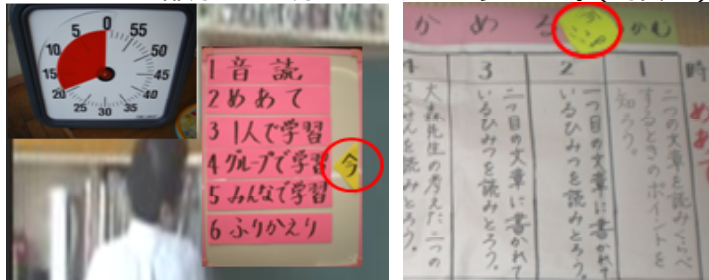
キーワードを用いて、できるだけ書く文字数を減らしつつ、文字と絵で1時間の学習の流れが一目で分かるような板書を目指した。（写真）



【写真：分かりやすい板書の例】

また、教材文だけでむし歯のでき方を読み取る前に、言葉の意味理解を助ける絵カードの並べ換えの活動を取り入れた。これにより、児童一人一人が主体的に活動に取り組むことができた。（写真）

また、1単位時間の見通しをもたせて分かりやすくするために、タイムタイマーを活用したり、学習活動を短冊に書いたものを黒板に貼り付けて、その活動が終わったら外したりした。（写真）さらに、単元全体の学習計画表を常に教室側面に掲示しておき、今学習しているところがどの部分なのか分かりやすいようにした。（写真）

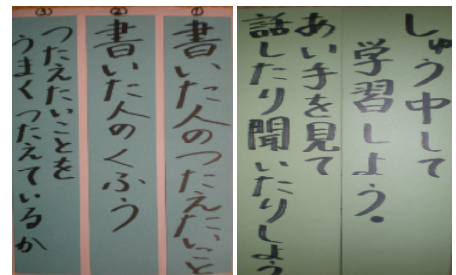


【写真：1単位時間の見通し】【写真：単元の見通し】



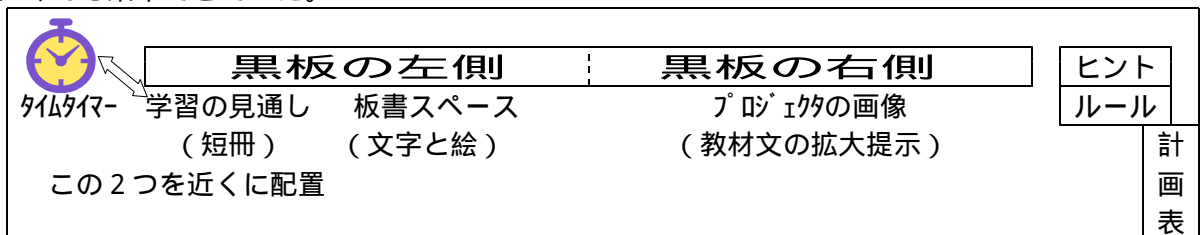
【写真：個での思考活動の様子】

加えて、教材文を読み取る時にヒントとなる学習のポイントや、児童に守らせたい学習のルール（写真）なども常に掲示して視覚化することで、すべての児童が意識しやすいようにした。



【写真：ヒントやルールの視覚化】

分かりやすい授業のモデル構築については、このように視覚化されたものを黒板周辺に工夫して配置することが教室環境整備の面から考えられる。（資料）本時の学習を行う上で、必要性が高いものは教室前面に、必要性が低いものは教室側面に配置することで、視覚情報が多くても集中できていた。



【資料：黒板周辺の環境整備】

イ 「指示、説明、発問の工夫」の観点から

全8時間の主な指示・説明・発問を事前にまとめ、学級担任と共通理解した上で簡潔な発言ができるように心がけた。(資料)

主な【指示】・【説明】・【発問】	<p>【p68〜69を読みなさい】 <大森先生はどんな文章を書くことにしましたか> <大森先生が、自分のつたえたいことが読む人につたわるように考えたことは何ですか> <二つの文章を読むときに気をつけることは何ですか> 【p70〜71を読みなさい】 <どのようにしてむし歯になるのでしょうか> <大森先生のつたえたいことは何でしょうか> 【二つの文章とも大森先生がつたえたいことは同じでした。でも、「中」に書いてあることがらのとり上げ方や説明の仕方が違っていました。】 <どちらの文章の方が食べた後、すぐに歯をみがこうを強く思いましたか> 【書いたものをもとに自分の考えを発表しましょう。友だちの考えにある大事な理由は何なのかよく聞きとりましょう。】</p>
------------------	---

【資料】：教師の発言の精選に向けた取組

展開 30分	<p>7 一人しらべと話し合いをする。 「どのようにして、むし歯になるのでしょうか。」(主発問①) 「言葉で書きまとめましょう。」 「書いたことを発表しましょう。」</p> <p>8 つたえたいことさがしをする。 「大森先生が一番伝えたいことは何でしょう。」(主発問②) 「ワークシートにできるだけ短く書きまとめましょう。」 「大森先生は、みんなに何をしてほしいのでしょうか。」</p>
-----------	---

【資料】：指導案上の表記例

また、指導案の工夫として学習指導過程を書くときに、学習内容・活動だけでなく、「教師の主な指示・説明・発問」を書く欄を設け、教師が発言することを事前に精選するように心がけた。(資料)授業の展開段階で、「形式段落の～に出てくる言葉の中で3回以上出てくる言葉を探しましょう。」「見つけたら で言葉を囲みましょう」という指示を出した。このような分かりやすい指示があると、多くの児童は一斉に作業に取りかかることができた。教材文を何度も確認しながら、丁寧に読み取る姿が見られた。(写真)



【写真】：一時一動作で活動する

ウ 「ワークシートの工夫」の観点から

全8時間分のワークシートを2種類ずつ作成し、児童が毎時間自分でワークシートを選んで学習できるようにした。ヒントありのワークシートの主な特徴は、穴埋め式でキーワードだけ書き込む、答えを見つけるためのヒントが載っている、きれいに書きやすくするためにマス目があるなど、国語が不得意な児童に対応している。ヒントなしのワークシートの主な特徴は、自由記述の割合が高い、答えの文字数が制限されているなど、国語が得意な児童に対応している。(資料)

実際は、全8時間の学習においてほとんどの児童がヒントありのワークシートを選択し、学習したことをきちんと書きまとめていた。全員が書きまとめることができたという点ではよかったが、国語が得意な児童をヒントなしのワークシートによって鍛えたり、「次はヒントなしのワークシートに挑戦しよう!」というように学習意欲を高めたりするまでには至らなかった。

<p>めあて</p> <p>どのようにして、むし歯になるのだろうか。</p> <p>歯をみがかない。</p> <p>一 () がこの。</p> <p>二 () がこの。</p> <p>三 () は () とごまかして上になる。</p> <p>四 () が歯にくっつく。</p> <p>五 () がたまる。</p> <p>六 () ちよえる。</p> <p>七 むし歯になりやすくなる。</p> <p>大森先生がつたえたいことは何だろう。</p> <p>理由 (Using the 'I' pattern)</p>	<p>めあて</p> <p>どのようにして、むし歯になるのだろうか。</p> <p>歯をみがかない。</p> <p>一 () がこの。</p> <p>二 () がこの。</p> <p>三 () は () とごまかして上になる。</p> <p>四 () が歯にくっつく。</p> <p>五 () がたまる。</p> <p>六 () ちよえる。</p> <p>七 むし歯になりやすくなる。</p> <p>大森先生がつたえたいことは何だろう。</p> <p>理由 (Using the 'I' pattern)</p>
---	---

【資料】：2種類のワークシートの例

エ 「分かりやすい言語活動の工夫」の観点から

教材文をよく見ると、読み取りのときに大事な言葉の中で、「歯こう」「さいきん」「食べかす」等の名称や「ねばねば」「痛み」「しみる」等の抽象的で言葉のイメージ化をしづらいものが複数ある。こうした言葉の意味理解には個人差や分かりづらさがあると考えた。そこで、教材文を読み取らせる前に、大事な言葉に対応する絵カードを提示し、全員がその言葉の意味を正しく理解できるようにした。(写真)

その後、個人用の絵カードを全員に配布し、各自で絵カードを並べ換えてむし歯ができる順番を考えさせた。(写真) 個人用の絵カードがあることで全員が参加でき、並べ換えるという動作化が加わることにより、教材文を読むだけよりも分かりやすくなると考えた。このような手立てによって、国語が得意・不得意関係なくすべての児童にとって分かりやすく楽しい学習になり、互いが並べ換えた絵カードをもとに意欲的に話し合うことができた。(写真)



【写真 : 絵カードで意味理解】



【写真 : 個での学習】



【写真 : 学び合いの様子】

その後、全体で絵カードの順番を確認した。その際、絵カードを1枚ずつ並べさせたり、あえて教師が順番を間違えて絵カードを貼って「なぜ、この順番ではいけないの?」と発問し、教材文に注目させて理由を考えさせたりした。その理由は、多くの児童に発表の機会を与えたり、みんなで力をあわせて正答を導くことで互いの存在を認め合わせたり、話し合い活動を盛り上げさせたりすることをねらったからである。このようにスモールステップで読み取りを行うことで、最終的には教材文だけで読み取りができ、ワークシートに書きまとめることができた。

オ 「学習意欲を高める評価の工夫」の観点から

授業では、児童に称賛の言葉を多く声かけすることを第一に考えた。「手が真っ直ぐ挙がっているね」「上手に音読できるね」「聞く姿勢が素晴らしい」等と児童の状態像を称賛すると、多くの児童がそれをモデルにして模倣しようとする姿が見られた。(写真) しかし、検証授業においては支援の手立てが絞り込まれていなかったため計画通りに進めることができず、称賛の機会が少なくなってしまう。また、授業以外では、聴覚ではなく視覚に訴える方法として、学級担任の協力を得てワークシートに花丸をつけたりコメントを書いたりした。本単元では毎時間の自己評価を参考に、個々の理解度を把握したり、前時で学習意欲が低かった児童に、次時の授業の導入でできそうな問題を意図的に指名することで称賛を与え、学習意欲を高めるような手立てを行った。導入で個別に称賛した児童は、最後まで意欲的に学習に取り組んでいた。



【写真 : 称賛に応える児童の姿】

カ アンケート結果と考察

(1) 児童のアンケートから

質問1 教科書を大きく写したり、それに サイドラインを引いたり、絵カード を使ったりしたことで、学習が分か りやすかったですか？	とても分かりやすかった・・・10人 (30.3%) 分かりやすかった・・・20人 (60.3%) あまり分からなかった・・・2人 (6.0%) 全然分からなかった・・・1人 (3.0%)
---	--

質問2 先生の話(説明、質問等)は分か りやすかったですか？	とても分かりやすかった・・・19人 (57.6%) 分かりやすかった・・・13人 (39.4%) あまり分からなかった・・・1人 (3.0%) 全然分からなかった・・・0人 (0%)
-----------------------------------	--

質問3 国語の学習をがんばることができたか。

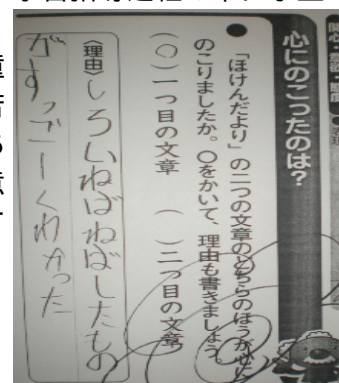
	よくできた	できた	あまりできなかった	全くできなかった
単元前	16	15	6	0
単元後	17	16	3	0

質問4 国語の学習が分かったか。

	よく分かった	分かった	あまり分からなかった	全く分からなかった
単元前	11	20	5	1
単元後	17	18	1	0

(2) 考察

- ・ 単元全8時間を学級担任と共通理解して指導を行ったので、一貫した流れで学習することができた。大きな変容は見られないが、児童が国語の学習をがんばっているととらえていることが分かった。
- ・ 分からなかったという6人(5人と1人)が単元後には1人(1人と0人)になった。本単元でとった手立て(視覚化の工夫、ワークシートの工夫、教師の簡潔な発言、称賛等)が有効だったととらえた。
- ・ 実物投影機で教科書の文章を拡大提示することは、大事な言葉や文をみんなと一緒に共有化したり、確かめたりするのに有効であった。
- ・ 絵カードを並べ換えてから、教科書の文章を読み取るという流れは、多くの児童にとって分かりやすく、意欲も高まった。絵カードの並べ換えは視覚的で分かりやすく、児童の興味関心をひくことができ、文章の読み取りをスモールステップで行うことは有効であった。
- ・ 視覚化、簡潔な発言、称賛、学習の見通し等を意識して授業すると、それが多くの児童にとってよさとして受け入れられ、分かりやすい授業を展開するために有効であった。
- ・ ほめる言葉かけ自体が少なく、発言していない児童をほめる手立てが不十分になった。全体をほめている言葉かけが十分に児童に届いておらず、称賛の在り方の検討が必要であった。
- ・ 指導案通りの時間配分で授業を展開することができなかった。学習指導過程の中に手立てを効果的に位置付け、時間配分を工夫する必要があった。
- ・ 右は、本単元の市販テストの一部である。(写真)この児童は国語が不得意であり、本単元の学習においても読み取りに苦労していた。しかし、このテストでは、自分にとって効果があった文章を選び、理由も書くことができている。検証授業で意味理解させたかった「ねばねばしたもの」という言葉を使っている。このことから、検証授業においてとった手立てによって、その児童なりに教材文の読み取りができたと考えられる。



【写真 : 授業の成果】

5 第2回検証授業の実際（小学校第3学年「サーカスのライオン」）

ア 「視覚化の工夫」の観点から

今回の授業では、プレゼンテーションソフトを使用して提示資料を作成することで、聴覚に加えて視覚からの情報も児童に与えることを心がけた。（資料 ）一時一動作の短い言葉かけでスライドをテンポよく替えていくことで、多くの児童は集中して画面を見つめ、「今何をすべきか」を把握して学習に取り組んでいた。

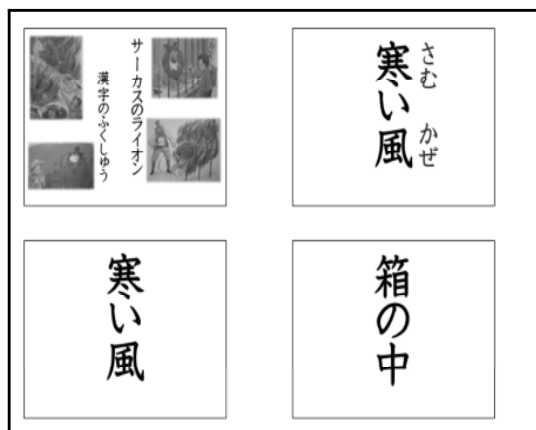
授業の導入では、フラッシュ型教材を作成し、漢字の読みの復習を行った。（資料 ）スライド1枚に対して1問ずつ問題を載せることですっきりと見やすくなり、読みの苦手な児童も声を出して意欲的に取り組んでいた。

授業の終末では、本教材への思いがこもった作者の手紙を教師が朗読して児童に紹介した。その際に朗読に合わせて、手紙の内容を文字で表記しスライドで示した。（資料 ）これらのスライドはしばらくしたら消えて見えなくなる特徴があり、消えることで文字情報が増えすぎないよさがある。

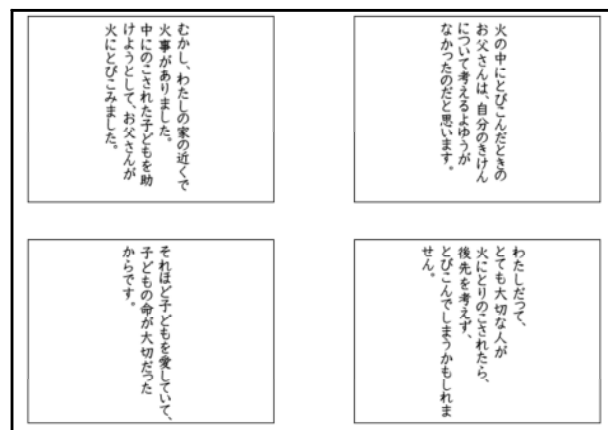
児童は教師の音声を聞きながら、画面の文字を食い入るように見つめて、作者の思いを感じていた。



【資料】：スライドの一部

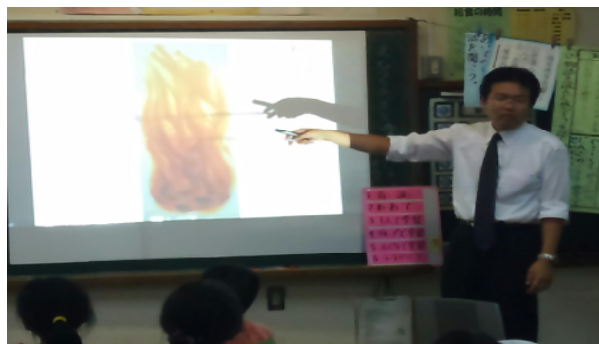


【資料】：フラッシュ型教材



【資料】：手紙を文字表記

また、本時では主人公が火の中に飛び込み、空へ向かって駆け上がっていくという場面の気持ちを読み取らせるために、場面ごとに教科書に載っている挿絵を拡大提示したり、映し出した挿絵の余白に、児童から出た意見を書き込んだりして、主人公の気持ちを全員が理解できるような配慮をした。（写真 ）さらに、教科書の音読の様子を、プロジェクタにビデオを接続して、スクリーンに映し出した。自分の姿が映し出されることで、児童は読みの姿勢や声量を自分でコントロールすることができた。また、聞いている児童はスクリーンを見ることで、友達の良いところに気付き、自分の音読に取り入れることができた。（写真 ）

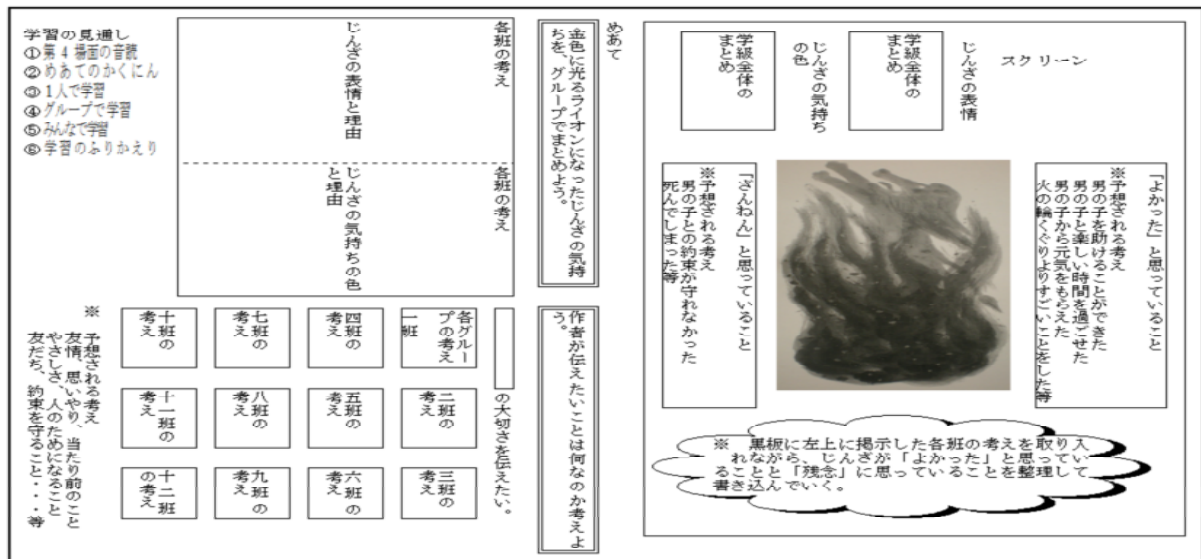


【写真】：挿絵の拡大提示



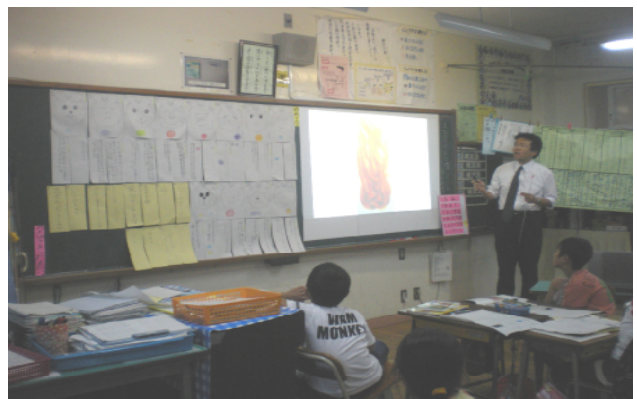
【写真】：音読の姿の投影

本時は黒板の右側をスクリーン、左側を掲示スペースとして活用できるような板書計画を立てた。(資料) これらは、授業が終わるまで消えずにずっと残る。これも視覚化のよさである。



【資料 : 板書計画】

児童の考えが黒板に掲示されることで、自分の考えを再度確かめたり、友達の考えと自分の考えを比較したりすることを通して、思考を深めることができた。(写真)

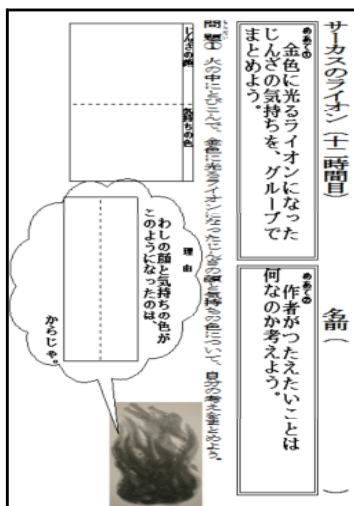


【写真 : 実際の黒板の様子】

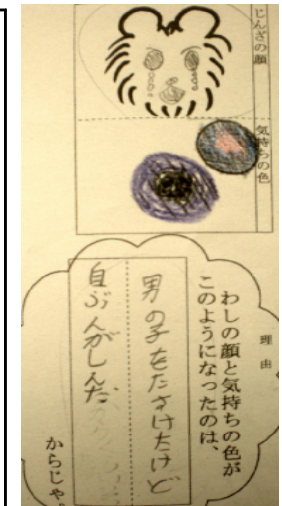
イ 「分かりやすい言語活動の工夫」の観点から

国語が苦手な児童にとっては、登場人物の気持ちを想像して、それをすぐに言葉で表現することが難しいのではないかと考えた。特に書くことや読むことに苦手さがある児童に対しては、気持ちという見えないものを言葉に置き換えて言語化する学習を細分化すると有効ではないかと考えた。そこで、言葉以外の表現方法の活用を試み、気持ちを言葉で表現する前に、登場人物の表情を絵で表したり、登場人物の気持ちを色で表したりできるようなワークシートを作成して活用させた。(資料) 自分が想像した気持ちを絵や色で表した方が、その後でそれを言葉に書き換えやすいと考えたからである。実際に書かしてみると、すべての児童がそれぞれの感じ方や読み取り方で主人公の気持ちを絵や色で表現し、その理由を書くことができた。(写真)

主人公の気持ちを自分で考えてワークシートに書き込んだ後に、3人グループを作らせて、友達との学び合いの時間を確保した。この3人グループは、前時までのワークシートや振り返りプリントに書いてあることを見たり、学級担任から学習の状況を聞き取ったりして意図的に編制したものである。「国語が得意なAさん、苦手なBさん、その中間のCさん」という能力差のある3人とした。

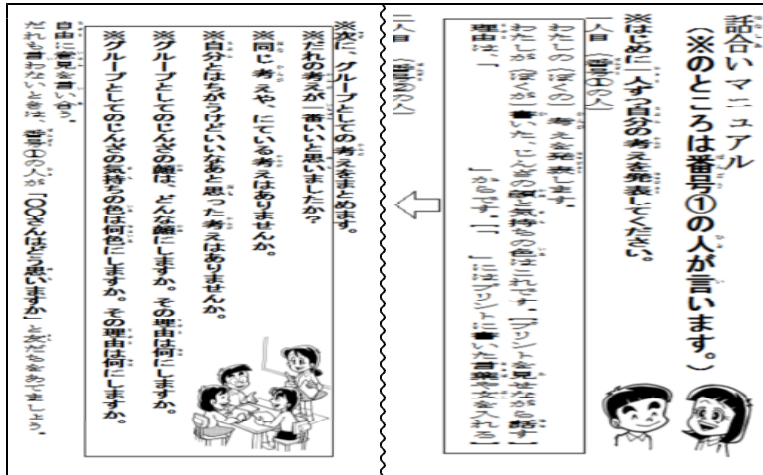


【資料 : ワークシートの一部】



【写真 : 解答例】

能力差があるグループで話し合うことで、教え合う姿が見られたり、自分とは違う意見を聞いたりすることができると思った。また、3人グループだと役割分担が明確になり、学習への参画意識が高まると考えた。学び合いの時間では、話し合いマニュアルを使って自分の考えを発表させた。(資料⑳) 国語が得意なAさんの発表の様子を最初に見ることで、Aさんをモデリングして、CさんやBさんが自分自身の発表に生かすことができるように、発表はAさん Cさん Bさんの順番で行わせた。どのグループも話し合いマニュアルを利用することで、Bさんも含めて全員が自分の考えを友達に発表することができた。(写真)



【資料⑳：話し合いマニュアルの一部】

【写真：3人グループでの話し合い】

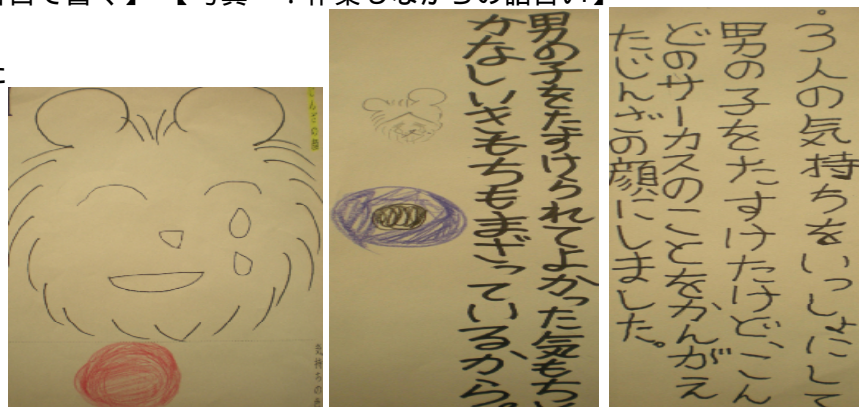
3人の話し合いで考えをまとめ、グループごとに「主人公の表情の絵」「気持ちの色」「その絵や色にした理由」を書いていった。(写真) 児童は、話し合いマニュアルをもとに3人の考えをまとめてから「主人公の表情の絵」などを書くかと仮定していた。しかし、実際は話し合いマニュアルに沿ってそれぞれが自分の考えを発表できても、話し合いマニュアルを活用して3人グループの話し合いを深めることは不十分であった。しかし、「主人公の表情の絵」などを書く作業をもとに、「なんでこんな顔になったの?」「この色にした理由は何にする?」などと和やかな雰囲気の中、自分の考えを伝え合い、理解を深め合う姿が多く見られた。(写真)



【写真：グループの考えを各自で書く】

【写真：作業しながらの話し合い】

グループの考えをまとめたワークシートを、黒板の左側に次々に掲示した。(写真) 各グループの考えを見比べながら、主人公の気持ちとしてふさわしいものは何なのかを学級全体で話し合い、授業の最後に各自の考えを再度書かせた。



【写真：各グループがまとめた考えの一例】

ウ 「学習意欲を高める評価の工夫」

学習意欲を高めるために、授業の導入で意図的に児童をほめる仕掛けを2つ取り入れた。1つはICTを活用したフラッシュ教材による漢字の読みの復習である。(写真⑳)「全部読めるかな?」「先生が問題を出す速さについてこられるかな?」等と児童が乗ってくる言葉かけを行い、教科書の本文にある新出漢字を10問出題した。児童は大きな声で次々に漢字を読むことができた。「すごいね!みんなの勝ちだよ。毎日漢字の勉強を頑張っているんだね。」とほめると多くの児童は自信たっぷりの表情で満足そうであった。もう1つは音読である。(写真㉑)先ほどの漢字の復習により新出漢字の読みへの不安はほとんどないと考えた。ここでもICTを活用して音読している姿をスクリーンに映し出したり、音読する児童を交代するたびに、「スラスラ読めていたね」「読む姿勢が素晴らしい」などその児童のよさを具体的に学級全体に伝えた。音読のよいモデルが広がることで、音読が苦手な児童も上手に読むことができるようになった。

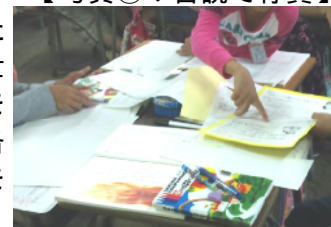


【写真㉑：復習で称賛】



【写真㉒：音読で称賛】

また、3人グループでの学習では、分からなくて困ったときに友達同士で教え合うことができ、学習意欲を保つことができた。(写真㉓)これは意図的なグループ編制の仕方や今までの学級経営によってもたらされた効果だと思われる。お互いを尊重し合う観点からも友達同士の教え合いは大切なことだと考える。さらに、3人グループの考えを書きまとめた用紙を全グループ分黒板に掲示した。これを見ながら各グループの考えのよさやおもしろさを学級全体に伝え、全員の考えを大切に生かすようにしたことで主体的に学習に取り組む姿が見られた。



【写真㉓：教え合いの様子】

検証授業では、児童の言動を肯定的に捉えて言葉かけによる称賛を基本とすることを心がけていたが、普段の授業においては振り返りプリントに毎回目を通し、花丸などで視覚的な称賛を行うことを学級担任に依頼した。(写真㉔)視覚的な称賛をすることで、児童はそれをいつでも見ることができ、学習の様子を先生がしっかり見届けてくれていることを実感していた。また、単元の振り返りを1枚のプリントに書かせ、前時と本時を見比べて自己評価することができるようにした。実際には、学習が進むにつれて毎時間の感想が具体的になり、学習意欲が高まった児童が目立つようになった。



【写真㉔：視覚的な称賛】

エ アンケート結果と考察

(ア) 児童のアンケートから (アンケート対象児童：35名)

Q プロジェクタ・パソコン・ビデオなどの機器を使った学習は分かりやすかったか?	YES 32人 (91%)
Q 主人公の気持ちを表情や色で書いてから、それを言葉に表す方法は分かりやすかったか?	YES 24人 (69%)
Q 話合いマニュアルを使った活動は、発表がしやすく、話合いが分かりやすかったか?	YES 29人 (83%)
Q 主人公の気持ちを1人で考えた後、3人グループで話し合ったり学級全体で話し合ったりする活動は、分かりやすかったか?	YES 27人 (77%)

(イ) 考察

- ・ ICT活用をしても100%の児童が分かりやすいと回答していないことから、教師のICT活用の仕方や見せ方などに改善の余地があると考えられる。
- ・ 言葉以外のものを使って自分の考えを表現する方法は、表現に時間がかかる、思考が広がりすぎるといった課題はあるものの、多様な考え方が出て活発な言語活動につなげることができた。
- ・ 話合いマニュアルがあると自分の考えを発表することには有効であったが、話合いを深めるまでには至らなかった。
- ・ 意図的なグループ編制により友達とのかかわりの中で学習させることは効果的であった。

オ 児童の意識の変容

5月(37人)と10月(35人)で児童の意識の変容を調査したところ、次のようであった。

質問 国語の学習が分かったか？

	よく分かった	分かった	あまり分からなかった	全く分からなかった
5月	11人	20人	5人	1人
10月	17人	17人	1人	0人

質問 次の国語の力について、「得意」または「好き」ですか？(肯定的な回答数)

	話すこと	聞くこと	書くこと	読むこと	興味・関心
5月	13人	26人	25人	15人	26人
10月	14人	27人	25人	19人	25人

質問 自分には、自分のよいところ・好きなどころ・頑張っているところなどがあるか？

	たくさんある	まあまあある	あまりない	ほとんどない
5月	4人	17人	11人	5人
10月	10人	12人	6人	7人

学級担任による普段の授業に加えて、2回の検証授業で行った手立てが多くの児童の学習意欲を高めることや授業の分かりやすさにより効果を与えることが分かった。友達と学び合いながら学習活動に意欲的に取り組み、国語の学習が「分かった」と感じるようになった児童は増加したが、国語の力である3領域の能力の向上については児童自身が実感できるまでには至らなかった。また、自己肯定感に対する変容を見ると、「あまりない」が減り、「たくさんある」が増えたことから全体的に自己肯定感が高まった児童が増えたにとらえる。

成果と課題

授業改善のための手立て(個に応じる支援、全員参加型の言語活動、お互いを尊重し合う仕掛け)を指導に取り入れた授業を行うことは、多くの児童にとって楽しく分かりやすい学習につながり、学習意欲を高めることができ、自己肯定感の向上にもつながった。

本時の目標を達成する手段として絵カードやワークシート等の視覚的な情報を活用し、意図的なグループ編制や話し合いの工夫を行うことで、豊かな言語活動が展開され、思考や理解の深まりが見られた。

教科指導と特別支援教育を共通するものとしてとらえ、この2つを両輪として教材研究を行い授業を実践することが、教師にとっては指導力の向上につながると実感することができた。

単元における国語の力の伸び具合を客観的に評価するための指標の吟味が不十分であった。

本研究では、国語科に特化して特別支援教育の視点を生かした授業づくりを行ったが、本研究の基本的な考え方は他教科の授業づくりにも大切なものであると考える。授業を中心として、学校生活全体の中で確かな学力や自己肯定感を高めていく研究や教育実践を今後も継続して行いたい。すべての児童の笑顔と未来のために「やさしい教育」を地道に行うことは、教師の職務の原点であり、これからの共生社会を構築する人材づくりにもつながる非常に意義深い教育実践であると考えている。

《参考文献》

・ 小学校学習指導要領	文部科学省	東洋館出版社
・ 小学校学習指導要領解説 国語編	文部科学省	東洋館出版社
・ 特別支援教育ガイドブック	宮崎県教育委員会 特別支援教育室	
・ みやざき小中学校学力・意識調査	宮崎県教育研修センター	
・ 通常の学級の授業ユニバーサルデザイン	全日本特別支援教育研究連盟 編	日本文化科学社
・ 授業のユニバーサルデザイン	桂聖 廣瀬由美子 編著	東洋館出版社
・ 国語授業のユニバーサルデザイン	桂聖 著	東洋館出版社